

東アジアの美術に関する資料学的研究 (①美01-07-2/5)

目 的

日本を含む東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみを解明することを目指す。研究にあたっては、より質の高い資料の提示が求められる時勢に対応して、新しい技術、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たすこれからの美術資料のあり方や可能性を探り、資料の収集・蓄積・公表等においてそれを具体的に実現することに留意している。

成 果

(1) 情報資料の収集のための調査

黒田清輝「湖畔」（東京国立博物館蔵）の制作地である箱根での取材調査（田中）。狩野正信「周茂叔愛蓮図」「山水人物図」（九州国立博物館蔵）、雲谷派「山水図屏風」（萩美術館蔵）の作品調査（綿田）。ロンドン、コートールド・インスティテュートでのウィット・ライブラリーに関する取材調査（山梨、江村）。

(2) 美術史研究のためのコンテンツの形成

平成22年度に『日本絵画史年記資料集成（15世紀）』を刊行すべく、古美術展カタログ等に散在する情報を抽出して統合するための仮登録作業を継続して行っている。事業の発展性を考慮し、絵画に限らず15世紀の年紀を有するものすべてを登録することを旨としたため、今年度は約2,600件（うち絵画は約500件、ともに重複データをふくむ）の情報を集めた（綿田）。

(3) 研究会の開催

折々の総合研究会、企画情報部研究会において研究経過・成果を発表したほか、オープンレクチャーを本研究と関連させ、「人とモノの力学」というテーマのもと11月2・3日に開催（内容については、68頁を参照）、また同テーマで国立台湾大学芸術史研究所の陳芳妹氏を招聘し、1月15日に「淡水鄞山寺に造られた神聖空間と民族相互認識の問題—社会芸術史の探究」の演題で講演会を開催、18世紀末から19世紀初頭にかけて台湾へ移住した漢民族、とりわけ福建省西山区の客家汀州を出身とする人々の表象についての理解を深め、講演後はマイノリティー（少数派）の自己表象をめぐる議論が交わされた。10月12日には『美術研究作品資料 第5冊 黒田清輝《湖畔》』刊行のための研究協議会を荒屋鋪透氏（ポーラ美術館）、植野健造氏（石橋美術館）、金子一夫氏（茨城大学）、鈴木康弘氏（箱根町教育委員会）、渡邊一郎氏（修復研究所21）を交えて開催した。

(4) 報告書の刊行

黒田清輝「湖畔」を対象として『美術研究作品資料5 黒田清輝《湖畔》』を出版刊行した（論文等、本文の内容については92頁を参照）。

論文等掲載 8件

- ・皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（上）」『美術研究』392 pp. 1-21 07.9（他7件）

口頭発表 7件

- ・綿田稔「宗湛の研究」総合研究会 東京文化財研究所 07.7.10（他6件）

出版物 1件

- ・『美術研究作品資料 第5冊 黒田清輝《湖畔》』 08.3

研究組織

○塩谷純、中野照男、勝木言一郎、山梨絵美子、田中淳、津田徹英、綿田稔、皿井舞、江村知子（以上、企画情報部）、相澤正彦（客員研究員）